農林業経営学部

農業経営学科

農業経営のプロフェッショナルを育てる。

農業経営学科では、新しいかたちの農業の中核となるべきリーダーを育成していきます。これからの時代を担うのは、変化を恐れず、何事にも柔軟に対応できる人材です。グローバルな市場で勝負する農業の国際化や、最新技術を駆使するスマート農業などに対応できるよう多様なカリキュラムを用意しています。

新しい時代、農業分野の可能性を広げる。多様なビジネスの視点を磨いていく。

学科の特長 1

農業の「生産管理」と「経営管理」の両方の理論を学べます。

最新の技術を使ったスマート農業など生産の現場は大きく進歩しています。基礎から先進的な生産技術まで理解できるよう多角的なカリキュラムを用意しています。また農業をしっかり事業として運営していくために、経営に関わる知識も学びます。さらに時代の動き、国際情勢を理解することなど柔軟な対応力を身につけることも大切なポイントです。

学科の特長 2

学内外での豊富な実習で学べます。

学内実習：学内圃場で基礎から先進的なものまで生産技術を学ぶ。学内加工施設で6次産業化の基礎から販売まで学ぶ。
実地体験実習：優れた農業経営体で経営実態の理解を深める。
臨地実務実習：東北6県の農業経営体で、生産技術及び経営管理に関する知識、技術、経営戦略等を学ぶ。
国際農業・森林業実習（自由科目）：海外の大学や先進農業地で農業経営の実態を学ぶ。

学科の特長 3

幅広い分野が学べます。

本学科では農業に密接に関連する分野も学修することができます。（例えば、食品製造・販売、発酵学・醸造学など）これらは将来の事業展開や経営のさらなる発展につながる可能性があります。

地域の課題を解決できる未来の農業経営者としての力を養う。

食料を生産し、豊かな農村を担う農業経営者が求められています。農業に興味があれば農業経営者になる素質があります。農業経営学科は、その素質の発揮に必要な生産理論や技術などの知識と経験を獲得でき、優れた経営を行う経営者に出会い、学べます。生産管理と経営管理などを体系的にそして集中的に学ぶ「職業専門科目」を通して東北の農業の現状と課題を理解し、地域課題の解決方法を考える力を身につけます。また、教養を深める英語や情報などの「基礎科目」と、農業経営に活かせる様々な分野の知識を獲得できる「展開科目」で経営者としての視野を広げることができます。そして、学んだことを活かし実践するために自ら目指す農業経営を行うための分析・計画作りを実習先の経営者と教員がサポートします。農業経営者を目指すみなさんを待っています。

東北農林専門職大学
農林業経営学部
学部長 兼 農業経営学科 学科長予定者

小沢　亙
Wataru Ozawa

PROFILE
博士（農学）（東北大学）
専門分野：農業経済学

秋田県立農業短期大学、山形大学農学部等で農業経営・経済の教育と経営効率性、地域の合意形成、農業者のモチベーションを研究。山形県農業・農村政策審議会会長を長年にわたり務める。山形大学名誉教授

4年間の学びのイメージ

1年
農業の分野全般にわたる講義・演習と実習などを通じ、自分が将来的に経営したい分野への理解を深める。

2年
自らが将来経営の軸にしたい分野を中心とした生産管理の学びなどを深める。

3年
農業経営に必要となる経営管理の学びなどを深める。

4年
これまで学んだ生産管理及び経営管理の学びなどを総合化し、就農に備える。

「臨地実務実習」は2年次から4年次まで毎年30日×3＝計90日間

安定した雇用を守るためにもしっかりとした経営を続けていきます。

臨地実務実習先紹介 1

インターネットも活用して、井上農場のファンを増やしたい。

祖父の代から家業として農業を営んできましたが、時代とともに変化している部分があると実感しています。例えばインターネットで米や作物を消費者の方へ直接販売できるようになりました。ただうちではあくまでお客様とつながりを持つひとつの手段として使うよう意識しています。百貨店の展示会などで知った方が買いやすくするなど、顔を知る相手との交流も大切です。井上農場の米だからというファンを作りたいですね。また地域の若い世代が働きたいところとして魅力に感じてもらえるよう環境も整えつつあります。法人化もその一環で、雇用主としての責任も大きくなっていると自覚して安定経営に努めています。

株式会社井上農場
専務取締役
井上 貴利

PROFILE
株式会社井上農場
山形県鶴岡市渡前字白山前14
https://inoue.farm/
交流施設・ライスセンター
山形県鶴岡市渡前字山道東91

時代の流れを読み、危機を乗り越え、新しい果樹のビジネスを展開。

臨地実務実習先紹介 2

震災を機に6次産業化を推進。コロナ禍も続々アイデア実現で乗り越える。

この観光果樹園には、かつては大型バスが次々と詰めかけました。しかし東日本大震災で来園者は激減し、さくらんぼの多くを廃棄することに。しかし廃棄するのは忍びないと冷凍さくらんぼやさくらんぼ果汁を活用したソフトクリームを開発し、2015年のカフェのオープンと同時に、敷地内のプレハブで販売したところ年間6,000個を売り上げました。さらにソフトクリームを使用したフルーツパフェは、年間20,000個売れるヒット商品に。その後6次産業化は地元の酒造会社やお菓子店と連携した商品開発へつながりました。コロナ禍を機に通信販売を強化し、減少した観光農業事業の売上をカバーしました。自販機やウェブサイトを使った企画などアイデアは尽きることがありません。

株式会社やまがた
さくらんぼファーム
代表取締役
矢萩 美智

PROFILE
株式会社やまがたさくらんぼファーム
山形県天童市大字川原子1303番地
https://www.ohsyo.co.jp/